



遥かな国の冒険譚

聖者の護符

雪村月路

話に聞いていたとおり、荒れ野の中に、一軒ぽつりと宿屋があった。遠くからでも宿屋とわかるのは、大きな看板が出ているからだ。がっちりした体つきの、宿の主人らしき男が、夕焼け空の下で、旅人たちに向かって手を振っている。

一行が馬で近づくと、主人は笑顔で声をかけて来た。

「こんばんは、みなさん。今日はここに泊るのがよろしかろうよ。どこかで聞いて来ただろうけども、ここらは夜になると、あやしげなものがウロウロするからね。ともかく、屋根のある所にお入んなさい」

「ありがとう、世話になるよ」

と、4人を代表して、金髪の若者が、こちらも笑顔で返した。あたりを見回しながら、

「それにしても、本当に何も無いところだな。宿を続けるのは大変じゃないか？」

「やあ、それでも、ここらに一軒泊まれる場所がないと、旅の人たちは皆さん困るだろうから」

宿の主は誇らしげに、

「幸い、うちには、旅の聖者様からいただいた、ありがたい御守りもある。何を恐れることもなく、商いを続けていけるよ。さ、どうぞ」

一行は、馬を馬小屋につないだ後、ひとりずつ中に入った。しんがりになった黒髪の若者は、軒先に吊るされた護符を見て、足を止め、しげしげと眺めた。銀の細工にまじないを彫り込んだものが、いくつも組み合わされて吊り下がり、揺れている。彼の視線に気づいた主人が、

「ああ、それが聖者様の護符だよ。何と書いてあるのかは分からないけども、ご利益は確かだ」

「・・・手を触れても？」

「いいとも」

ゼラルドは護符に触れて、そっと、裏返したり、透かしたり、揺すったりした。宿の主人は何度もうなずいて、

「護符というものに詳しいひとは、皆さん感心なさるようだよ。わしには、何が何やら、さっぱりだがねえ」

「・・・これほど見事な護符を初めて見た」

ゼラルドはつぶやいて、何かを問うように、視線を宿の主人へ向けた。主人は、いくらか戸惑った顔をしたが、

「それをくださった聖者様は、荒れ野の中に行き倒れていたんだ。文無しでね。連れて帰って、何日か泊めて食べさせたら、元気になって、金がないから代わりにと言って、これを置いて行かれたのさ」

「・・・」

何かを懸念するかのようには黒い瞳を揺らしたゼラルドは、しかし、何も言わずにうなずいて、その場を離れた。

客室は3つあったので、フィアがひとつ、ゼラルドがひとつ、残りのひとつをルークとセレンが使うことにした——と言いながら、実際には、ルークは夜遅くまで台所において、宿の主人と世間話をした。話題は自然と、「夜になると荒野をうろつく怪しいもの」のことになった。

「お客さんも、もう少ししたら、窓の外を覗いてみたらいい。白くてぼんやりした、なんだか気味の悪いものが、いっぱい出て来るから。あれは何なのかねえ、亡くなった人の魂なのかねえ・・・」

「悪さもするのか？」

金髪の若者が尋ねると、主人は、うん、と頷いた。

「するよ。人を襲う。昔からそうだったけども、ここ何年かで、ますますひどくなった。まあ、護符のおかげで、ここには近づけないようだがね」

そんなことを話していると、黒髪の若者が部屋から出て来た。マントを羽織り、外出用のいでたちをしている。

「ゼラルド？ 珍しいな。まだ起きていたのか」

ルークが問いかけると、ちらりと視線を投げて寄越した。

「聖札を見た。外にいるあれを排除するのが、ぼくの役割だ」

ルークは立ち上がり、窓のそばに寄った。果たして、外には、宿を遠巻きにするようにして、宿の主人が言ったとおりの、「白くてぼんやりした、なんだか気味の悪いもの」が、いくつもモヤモヤと飛来していた。それらは宙を漂いながら、ふたつの目とおぼしき黒い穴を伸び縮みさせており、心の寒くなるような光景を作り出していたが、その真ただ中に、ゼラルドの言う「あれ」がいた。ひときわ大きな白い靄が、はっきりと人のかたちに凝って、目と口とおぼしき黒い穴を、虚ろに開いたり閉じたりしていた。

ルークは振り返った。世間話の続きのような口調で言った。

「手を貸そう。剣で切れるよな？」

「切れるだろうが、手を借りる必要などない」

「勝手についていくさ」

「お客さん！ ふたりとも、何を言ってるんだね。やめたほうがいい」

宿の主人が驚いて声をかけると、

「心配いらない」

金髪の若者は、戸口に向かいながら振り返り、にこっと笑った。

「かなわないと思ったら、とっとと逃げて来るからさ」

ふたりの若者が外に出ると、月明かりの下で、靄のような亡霊たち――としか思えないもの――は、遠巻きにしながら、ゆらゆらと飛び回った。その真ん中で、くつきりと白く浮かび上がっている亡者は、口のように見える虚ろな穴から、しゃがれた声を無理やり押し出すようにして、しゃべった。

「そ、れ、を・・・、よ・・・こ・・・せ・・・」

ゼラルドは、軽く首をかしげて、尋ねた。

「寄越せとは、何をだ」

「見、え、ぬ・・・、が・・・、近、く・・・」

亡者は、ほうっ、と白い息を吐き、のろのろと片手をあげて、ゼラルドを指さした。

「寄越さ、ぬ、なら・・・我、は、ルイー、ラ・・・名に、お、いて・・・命じ、る。・・・滅、ぼ、せ！」

言い終えたとたん、まわりの靄めいた亡霊たちは、いっせいに飛び上がって、こちらに向かってきた！

剣を抜こうとしたルークを、ゼラルドは手で制した。その口元には、妖しく冷やかな微笑が浮かんでいた。

「名には、名を。我はゼラルド・ルインドウーラ・ルーズヴェルン。この名において、汝らに命じる」

黒髪の王子が片腕を動かすと、銀の腕輪が重なり合ってシャランと鳴った——と同時に、靄のような霊たちは、てんでに飛びかかろうとした形のまま、ぴたりと動きを止めた。まるで、時間と空間が、一枚の絵に凝り固まってしまったかのような光景だった。中央の亡者だけが、のろのろと伸び縮みして、かすれた声で叫んだ。

「ルイン、ドゥー、ラ……」

ゼラルドは、かまわずに淡々と続けた。

「死霊たちよ、聞け。汝らを絡め捕えた鎖は、すでに断ち切られた。汝らをこの地に縛るふるき主を討ち、あるべき場所へ帰れ」

ゼラルドは、腕を伸ばして、白い亡者を指さした。止まっていた時間は再び動き出し、靄たちは、ねじれるようにして方向を変えると、亡者に向かって飛びかかって行った。

「お……お……お……！」

幾多の靄が亡者のまわりに集い、渦を巻き、そして、どこへともなく飛び去った。曇りなく冴えかえった夜空の下、さっきまで白い亡者のいたところには、1体の骸骨が転がっていた。骸骨は、カタカタと歯を鳴らしてしゃべった。

「よこせ……、よこ、せ……、護、符……」

「護符。これに触れれば、汝が滅びるだろうに」

と、ゼラルドは言いながら、何を考えたものか、宿の軒先に吊るされていた護符をシャラシャラと取り外した。骸骨へと歩み寄り、突き付けた。

「これが、汝の望みか」

「お、お……」

骸骨は、怯む様子を見せたが、ぶるぶると震えながら骨だけの腕を伸ばし、聖者の護符に触れた。そして、音もなく崩れた。

骸骨であったものは、いまや、ひとつかみの灰だった。そして、その灰は、直後に吹いた風にさらわれて、散った。

ひとり立つゼラルドの隣に、ルークが歩み寄った。

「たしかに、何の手助けもいらなかったな」

ゼラルドは答えず、ただ、手の中の護符を見つめていた。

ルークも護符を見た。護符は月明かりを受けて銀色に輝いていたが、亡者が触れたせいなのだろう、最下部が欠けてしまっていた。

「哀れな末期だ」

「ルーク……気づいていたのか」

ゼラルドが目を上げる。金髪の若者は、答えるともなく、
「護符の話聞いたときに思った。魍魎の行き交う荒野で、行き倒れた旅人を守ったのは、もとより所持していた護符の力ではないのか。その護符を手放したあと、旅人は無事に目的地に辿りつけたのか、と」

「……」

ふたりの若者は黙り込む。彼らはおそらく、すでにその答を知っている。

かの聖者は思ったのだろう。「あのとき譲り渡してしまった護符が、この手にあったならば」と。その念が、亡骸を荒野へと帰らせたのだ。

「・・・あの亡者は、この地に古くから住む悪しきものに、取り込まれてしまっていた」

言いながら、ゼラルドは月の女神の印を切った。

「いまは自由だ。安らかに眠れ」

ルークも、片手を胸にあてて、短く祈った。安らかに眠れ。

若者たちが宿に戻ると、窓から一部始終を見ていた主人が、驚きとねぎらいの声をかけてくれた。一方で、話し声は全く聞こえなかったらしく、「聖者様の護符が、化け物の親玉を滅ぼしてくれた」と、欠けた護符に感謝を捧げているようだった。

「しかし、お客さんたちが化け物を返り討ちにするとはねえ！ あの気味の悪いものたちは、もう戻って来ないかね？」

「あれらは戻らないが、また別の異形が寄り付かないとも限らない。護符は、明るくなってから、ぼくが直そう」

そう言ったゼラルドは、翌日、出発前に、約束どおり護符を直した。欠けた部分を補うために、自分の腕輪をひとつ外して繋ぎ合わせ、小さな声で何か唱えながらあれこれ試した末に、ようやく納得できる形になったらしく、元通りに軒先に吊るして下げた。

「正確には再現できなかったが、欠けているよりは良いだろう」

「おお、ありがとう。前と同じに見えるよ。十分だ」

みなで外に出て、馬の準備をしながら、風になびく青い髪を押さえたフィアが、口にした。

「今日はあたたかくて、風がやわらかい・・・」

「ああ」

同意したルークが、ふと気づくと、黒髪の若者は、ゆうべ骸骨が灰と化したあたりを見つめていた。まるで、そこに誰かが立っているかのようだった。ルークの視線に気づいて、ゼラルドは振り返った。

「この土地は、新しい加護を得た」

それだけ言って、彼は馬の準備に戻った。

「そうか」

とだけ、ルークも応じた。宿の主人が見送りに出て来たので、にこっと笑って声をかけた。

「じゃあな、おやっさん。元気で」

「お客さんたちも、元気で」

ほどなく、旅の一行は出発した。

宿の主人が立って見送る傍らでは、新しく銀を接がれた護符が、陽光を受け、きらきらと光っている。

(完)

遙かな国の冒険譚
聖者の護符

<http://p.booklog.jp/book/109788>

著者: 雪村月路

著者プロフィール: <http://p.booklog.jp/users/ariadnemaze/profile>

ブログ: <http://snow-moon.cocolog-nifty.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109788>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109788>

電子書籍プラットフォーム: ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社: 株式会社ブックログ

遙かな国の冒険譚

始まりの物語・風の贈りもの

<http://p.booklog.jp/book/97421>

シリーズの読み始めに適した2編を収録。
リーデベルクの王子フルートと、クルシュタインの王女フィリシアの、
旅の由来と、道中の1ページ。

遙かな国の冒険譚

火の鳥

<http://p.booklog.jp/book/96700>

フルート、フィリシア、セレン、ゼラルドの一行は、旅先で、
さわると熱い卵をひとつ、手に入れたのだが…。

遙かな国の冒険譚

逃避行

<http://p.booklog.jp/book/99542>

聖なる国の第一王子は、従者ひとりを持って出奔したのだった。
ゼラルドが祖国をあとにした顛末を描く一編。

遙かな国の冒険譚

大道芸人の賭け

<http://p.booklog.jp/book/109562>

旅の途中、ルークは、ナイフを投げる大道芸人と出会う。
大道芸人は、評判を聞きつけた領主に呼ばれて…。

遙かな国の冒険譚

跳ぶ

<http://p.booklog.jp/book/98350>

リーデベルクの王子フルートと、その友セレン・レ・ディアの
少年時代のエピソード。
13才になったセレンは、国王に拝謁することになり…。

遙かな国の冒険譚

竜王の館（前編）

<http://p.booklog.jp/book/106706>

雨乞い行列に参加したフィリシアは、竜王の沼で…。
ヒロインの揺れ動く心を描いた前後編の前編。